

和歌

古語深秘抄

秘藏抄上

一

伊地知文庫

文庫20

324

1

60

55

50

45

40

伊地知氏書冊



四時を往々来々よ身々草木ハ  
枝々糸糸目々々々風々花々々々ハ  
道々季々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々



千々丸はさういふに成るが  
 人のまじりてはまじりては  
 あふらぬまじりてはまじり  
 事とせらぬまじりてはまじ  
 りてはまじりてはまじりて  
 のまじりてはまじりてはま  
 是騎者なりまじりてはまじ  
 是る骨のまじりてはまじり

是る古人のまじりてはまじ  
 置よはまじりてはまじりて  
 来しまじりてはまじりては  
 まじりてはまじりてはまじ  
 是る中まじりてはまじりて  
 向乃まじりてはまじりては  
 まじりてはまじりてはまじ

おもに傳授口決の事一はくはる  
うよせよとありはふも  
ぬとむゆ一其外の世よひり  
心ありんくはるはる一  
師近なり一物もれは師  
ひとくももたはる一  
一事一はるあせふりか  
たし。一はるあて板あいのらな

一一人よき一  
一我の秘  
又してありはる  
一  
乃道はる人に行  
おな一理もはる一

ほういふくはらふきりらむらひの結  
 昔はしきつゝいせよとまゐる文はくさ  
 一人のくさむきさういふあういふ  
 及ふくさういふくさういふ  
 ひうくさ

惠藤一雄

和歌古語係秘抄

惣目録

- 詩経標式
- 喜撰和奇式
- 孫娘和奇式
- 石見女式
- 右四式
- 秘藏抄

或況ふきり四式  
 やふ今うに其  
 目ちりを出  
 藏板行

躬恒述作

○新撰髓腦

公任卿化

○真傳抄

後賴述化

○私奇肘要

後成口作

○後身羽院河口傳

○私奇式

定家口化

○正風神抄

同作

○和歌庭訓

每月抄書

同化

○同口傳

家隆口作

○近來風神抄

抄政良基公

○瑩玉集

鴨長明化

○數河上

弁入道述化

○八雲口傳

為家口作

○よる乃屋

河仙厄化

○耕心口傳

竟孝法印作

○挂明抄

○八雲一云記

目錄

○私奇二言集

○同用意

以上

恒規未知素門取置殊樞治練素門  
不稱其才妨而為意製類是茲之情  
妄加穿鑿也凡頗本長奇及諸手筆  
一同五句也或無人書然或多省詞  
或頗著義如云  
加太千支之比尔素无太夫万泮五  
但則云加太子言以右須則天著河  
類是也  
又數素无八倍利泮就又左須已會  
八倍利奴就



看義類是也

造次續之甚於亂思上第二篇

若能具而書洞而六之五數於有孔

於義字外太万ハ新糸半太天万伴

利ハ太次等數是也

長祿四年<sup>庚辰</sup>正月十六日 山頭昭本令

書写早

東山隱士圓雅

以彼圓雅上人自筆本不粘一字今書写早

寛正四年十月廿日雨中書之

後五位上大藏大輔橘朝臣業文

伊地知氏書冊

秘藏抄上

古今打用躬恒撰之

ほ乃くとあ〜は〜乃はさき〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

子世乃たりにむし強む之故

是亦の歌乃むし強む之故

もよれ世の人くまをそむす人

一 ちかや城系 <sup>二</sup> ちかや城系 <sup>三</sup> ちかや城系

四 じり川内城系 <sup>五</sup> えしちかや城系 <sup>六</sup> や戸人

七 ちかや城系 <sup>八</sup> ちかや城系 <sup>九</sup> ちかや城系

十 次 川内 <sup>十一</sup> ちかや城系 <sup>十二</sup> ちかや城系

十三 たまご川 <sup>十四</sup> ちかや城系 <sup>十五</sup> ちかや城系

十六 ちかや城系 <sup>十七</sup> ちかや城系 <sup>十八</sup> ちかや城系

十九 ちかや城系 <sup>二十</sup> ちかや城系 <sup>二十一</sup> ちかや城系

二十二 ちかや城系 <sup>二十三</sup> ちかや城系 <sup>二十四</sup> ちかや城系

二十五 ちかや城系 <sup>二十六</sup> ちかや城系 <sup>二十七</sup> ちかや城系

二十六 ちかや城系 <sup>二十七</sup> ちかや城系 <sup>二十八</sup> ちかや城系

二十七 ちかや城系 <sup>二十八</sup> ちかや城系 <sup>二十九</sup> ちかや城系

二十八 ちかや城系 <sup>二十九</sup> ちかや城系 <sup>三十</sup> ちかや城系

二十九 ちかや城系 <sup>三十</sup> ちかや城系 <sup>三十一</sup> ちかや城系

三十 ちかや城系 <sup>三十一</sup> ちかや城系 <sup>三十二</sup> ちかや城系

三十一 ちかや城系 <sup>三十二</sup> ちかや城系 <sup>三十三</sup> ちかや城系

三十二 ちかや城系 <sup>三十三</sup> ちかや城系 <sup>三十四</sup> ちかや城系

三十三 ちかや城系 <sup>三十四</sup> ちかや城系 <sup>三十五</sup> ちかや城系

三十四 ちかや城系 <sup>三十五</sup> ちかや城系 <sup>三十六</sup> ちかや城系

三十五 ちかや城系 <sup>三十六</sup> ちかや城系 <sup>三十七</sup> ちかや城系

三十六 ちかや城系 <sup>三十七</sup> ちかや城系 <sup>三十八</sup> ちかや城系

三十七 ちかや城系 <sup>三十八</sup> ちかや城系 <sup>三十九</sup> ちかや城系

三十八 ちかや城系 <sup>三十九</sup> ちかや城系 <sup>四十</sup> ちかや城系

三十九 ちかや城系 <sup>四十</sup> ちかや城系 <sup>四十一</sup> ちかや城系

四十 ちかや城系 <sup>四十一</sup> ちかや城系 <sup>四十二</sup> ちかや城系

四十一 ちかや城系 <sup>四十二</sup> ちかや城系 <sup>四十三</sup> ちかや城系

十二日異名

短詩 旋頭行 誹諧行

まうをのいりや

秋の空にまをいりてとすれり

まをいりてとすれり 貫之

万葉

秋はつゝかまきりてとすれり

あふれ那りてとすれり

是未の尾花をいりてとすれり

ますとすれり

あふれ那りてとすれり

花のうらみあはれり

あふれ那りてとすれり

うらみあはれり

あふれ那りてとすれり

あふれ那りてとすれり

あふれ那りてとすれり

あふれ那りてとすれり

あふれ那りてとすれり

あふれ那りてとすれり

あふれ那りてとすれり

隣

三

此を花の李れ花也西より東へ  
つらね

五 ちかひのこころは

えし志願の身も

えし志願の身も築地へ

可くつらね也

六 山人乃ち思ふ

紅より花の月を海へ

山人と仙人也

此は家より雪の紅あり

七 山人電あり

山人乃ち思ふ

山人電あり

山人電あり

山人電あり

山人電あり

山人電あり

山人電あり

山人電あり

山人電あり

九 人とりぬさか戸つけらるるとき

螢もとり地火いこも一尋の銀忠

あれは家さる堂成るやたやま

十 ささやもりねおししむいさきよ

うらた一稲葉をたむさか

ささや守六田のりねも人も物

けきそくもいれもいけもよくみち田より

猪の志もむこく

十一 ささや小野のりねも人も物

ささやもりねおししむいさきよ

十二 ささやぬきもいさか煙もいさ

去山よりささやぬきのりねも

ささやもりねおししむいさきよ

白玉船といはれをいさ

十三 志行のおろもいさかたもいさ

ささやもりねおししむいさきよ

こいされ道といはれもいさかたもいさ

薪といはれ

十四 ささやもりねおししむいさきよ

ささやもりねおししむいさきよ

ついでに海原もさへついでに浪もさへり  
ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

ついでに海原もさへついでに浪もさへり

朝教

所ふれまききく玉められき  
さかるといひかつ戸へ所れまきく時のはと  
ぢり

十九

はやむのうられむ雲とひまけく

あそびのふねさる初音のこゝろ 小野篁

つらむのそとにまれ朝くまくのたをさとい  
郭公のそと

あそびのふねさる初音のこゝろ

越路のつらむのそとにまれ朝くまくのたをさとい

惟明

あそびのふねさる初音のこゝろ

廿

まふまのやあむむむむ八重のつらむ

龍田のやまのつらむのそとにまれ朝くまくのたをさとい 上野峯雄

まふまのやあむむむむ八重のつらむ

廿二

まふまのやあむむむむ八重のつらむ

庭もまふまのやあむむむむ八重のつらむ 貫之

まふまのやあむむむむ八重のつらむ

廿三

まふまのやあむむむむ八重のつらむ

あまれまのつらむのそとにまれ朝くまくのたをさとい 人丸

はなれ

ぢりぢりつれいさよ橋と云く

#4

けしんりーけいおきりけいおきり

とれおきーりあふ筆の形の家持

あきりーい畠をさく相おーい黄葉とて草

れるく土筆まれ初生

#5

あふれおきりけいおきりけいおきり

遠玉ほふせおぬぬ 讀人不知

さけきーいおたごくせれとてまぢり遠玉ほ

ことけいけき道く

#6

きーいあひとあきんとあふれい

さむくさおきききとあきん

きーいあひとあきんとあふれい

#7

きーいあひとあきんとあふれい

あひとあきんとあふれい

きーいあひとあきんとあふれい

きーいあひとあきんとあふれい

#8

きーいあひとあきんとあふれい

きーいあひとあきんとあふれい

きーいあひとあきんとあふれい

きーいあひとあきんとあふれい

あひとあきんとあふれい



夫り下まつるむ神のみうきく

ゆきけりるるるはれおあま

みそとら沖夜くゆきまの夜をさくさく

うりちりちほるれ神乃由夜を言をり

ちりあてき由ぶりりしたちちゆめ

ゆりりおきまはるわーまの神 園番御

たすけりるる今きいまるるくたうちを父

さくさみまのうてとら父夜をさく

きりちまのまきけりー目くらまきり

おろきーぬまわーめ神 深養父

うたさきてさききる君のあはさる

いふたきしー我ねそらき本

きりりりりりりりりりりりりりりりり

ちりりりりりりりりりりりりりりりり

ちりりりりりりりりりりりりりりりり

あーれ浦乃りりりりりりりりりりり

右にち海人の釣よもりりりりりりりり

をりりりりりりりりりりりりりりりり

をりりりりり

深行よりりりりりりりりりりりりり

卯教

秋三のつらさ  
去るは秋三のつらさなりたるは  
けりらるるは秋三のつらさなり

は秋三のつらさなりたるは  
あつたは秋三のつらさなり

秋三のつらさなりたるは  
秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

秋三のつらさなりたるは

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

あつたは秋三のつらさなり

ふんが身へさしーれ雄多と多くしれむらさ  
しめらりーとまらふさしーてしるし

あしちちちちりいふかのたぢふいし舞や

ちしんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

よりの身にはおんてく憂やんしし

あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

あしちちちち將にゆ男く悪されはむぢぢぢぢぢぢぢ  
可きぢぢぢぢぢあぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
あし麻あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ふしや今夜れし夢はまらつれうら  
まアまアまアまアまアまアまアまアまアまア  
ま女鹿のつよやうらぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
あしむぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
りぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ゆぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
不思議しうしぢぢぢ黒まみぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
将人の身ぢぢぢぢ鹿射ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
夢ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

みくちり

卅九

つらみゆききーふくをゆるる菊れ  
去りてささるれあのをてささる  
りさきくとい黄ゆり葉くすれ故に若葉は  
所門黄ゆりきく所あー竹よりゆより  
兼和菊と云兼和の葉と云ゆく去りて枝を  
き下枝と云ゆゆとぬめくたさゆり

卅十

身乃うさばあさけ秋よりぬきぬ  
あーきくはよささる時 談人  
ゆきゆくと新ゆり徐直すけりす

卅一

ていふを新いづりあささ  
あられは原ふまわゆ月うを酒舞会  
天は乃ほりゆいもあふと云可るれり  
了せしゆり女神をさく

朗詠部

一 紅鮮好仙か之電燈色

きりぬりぬ衣りかゆ電れあも  
とりあつ物を梅乃あゆむり  
紅く白く梅れあゆり香をもささる人  
みきぬかふおささる仙人の葉すか

又巻の上

雪の交あしやましくうる雪もけ梅の  
 つらさをちりしとよもあも也仙人のまはる  
 雪のちりぬるをわきまきりあまきり  
 燕昭王招涼之珠雷明月自揚  
 雪のわきぬるをわきまきりあまきり  
 ましむれ玉れうきかとうみゆ

燕昭王の玉のらつふ時むくも涼の雪  
 雪のちりぬるをわきまきりあまきり  
 鷓鴣 背に数片之紅終残  
 雪のわきぬるをわきまきりあまきり

ちりぬる雪のわきまきりあまきり

鷓鴣とり雪の木葉を背にちりぬる雪  
 あまきりぬる雪のわきまきりあまきり  
 木葉のちりぬる雪のわきまきりあまきり  
 暖泉流處冬草青

雪のわきぬる雪のわきまきりあまきり  
 こぼる雪水のわきまきりあまきり  
 雪のわきぬる雪のわきまきりあまきり  
 こぼる雪水のわきまきりあまきり

五  
昔<sup>タル</sup>為<sup>ト</sup>鴛<sup>ト</sup>今<sup>ト</sup>作<sup>ト</sup>泰<sup>ト</sup>時<sup>ト</sup>辭<sup>ト</sup>

おしひさやさしれおはさちのり  
かゝるや井乃やりきむら  
ちゝ多いのちの中はらゝせられも年  
中もけいひもわくてもむるも高と  
星に二つくりよみちし一おれにき出ぬ  
六  
及<sup>ホ</sup>暮<sup>ホ</sup>景<sup>ホ</sup>蟻<sup>ホ</sup>之<sup>ホ</sup>世<sup>ホ</sup>無<sup>ホ</sup>常<sup>ホ</sup>

蜂蟻とよ虫へ知じまわく夕ハ志ふる虫あり  
うれし世のりわよすもさへ人たさ

十二月異名

正月

紀友則

いひなむらも  
四方れ山きりうす  
二月  
三月やう  
えれて故やういれ字所おうむれ

敏行別下

八重れははらひのりさるるこ

松浦抄

十四

四月卯月

源宗平

卯月とてゆくは花よのめさく  
うらゝるまぬく月ほくまぬ

五月さ月

元首

郭云五月の雨うらまれて  
と都くもりかよ投うはちぬく

六月みか月

小野春風

これ月れけ思れさへさるうけく  
そらさるあはら風はさるさち

七月うら月

貞文

それるれはさるさるさるさ  
まきさるあはらまよきちあつむ

八月さつ月

深養父

初られはさるさるさるさるさ  
卯のりれはさるさるさるさ

九月あつ月

貞文

わらよあまらなうちれはさるさ  
かうふさうはさるさるさる

十月新月

素性

非流しれて及の末を志し  
うもれあしれ錦出され

十月 霜月

とけまたに雪まのうやありおたり  
そぬよ内なる露月の空

十一月 志す

おにやかく志をいれ定に成ふたり  
あられふあさうのねうね

又秘苑名あり

正月 さみより月

貫之

やーもわくさみより月よありあれた  
可さるゆーお松むくまら

二月 じめけさ月

友則

うくひまのふよぬ山のやらるるは  
花さるちあれむ光のさ月

三月 さもれさ月

同

たアノ馬もあれたりつらねあり  
さうかさ月うまやあしめは  
四月 ぬるさ月

家持

きりぬてきあふもくふとふ舞云

秘苑



六月より月まゝ及ぬる也

五月より月

小野篁

池つたけまきも申一尺れあぢりし  
やたにのち一はたこ月ま

六月より月

木山虎太子

ほととぎすのちこころをわら  
いともなれ月よあぢりま

七月より月

酒井人真

それさるめくあぢりま  
いふにふれらりて

八月より月

兼藝法師

まじくともさる月より  
あさつらつたに急るは

九月より月

菅原定基

これをもはつらり月あぢり  
けしきあさるにちあす

十月より月

同

うき山にかりまれあやに成み  
あぢり戸ねを神あつら

十一月より月

人丸

に花こそあれも月こそ何かなんね  
お月宮けしうおりのまきね

十二月年よひの月

あはれうらやまの月よひの月  
かきくしとふれまじりまね

是おあかうらに人うたれつう十二月れ異々  
きこら実名をえらしてえだの異々を反作あり  
此異名をきくうらやまにきみのこをいさぎ  
未の世人もこれ可ねくひさううら  
八短評之す

あふおやま	まねのうらに	にまひうた
我身ハ幸リ	あうら雲乃	大御時おと
うーれ祢乃	うつこもふ	村入いさま
逢中かき	あうらうそ	人御うらに
うらうら	おらうらそ	お入ひうら
あハハハ	いんうら	おらうら
格くうらの	きゆる時お	うらあま
思目みるわ	あはゆふれ	きふいけあ
だも毎も	えよのうた	村やます
村入のうら	あー引志	山下水法

こころをれて	ふけらるるを	きりけりかき
あひかきりて	あふゆきき	人志あつて
まみり免乃	夕うされも	むらりゆき
物かくた	あけらるる	せしむる
庭うゆき	さむやき	志あつて
しほりの袖ふ	きくつたれ	守りまゐり
おきりゆき	あけらるる	まはらるる
よほりも人	ありむとあひ	

九 旋頭行

一まらさけみりされ山乃まから紫志

文林之月時由乃よむる也せり  
 十 誦借号れ  
 しくまきれ田所つれりらほりまき  
 ちくれんがことあされくらよ



